



2025年1月
第757号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚教会
編集人 中山洋司
〒254-0045 平塚市見附町6-18
電話 〇四六三(32)八八三一



夢は枯れ野を

平塚教会牧師 北川一明

しかし私たちの本国は天にあります。

(フィリピ・三・20)

十二月、クリスマス準備のいちばん忙しい時期に三日三晩枯れ野を駆けめぐり、いわば旅行の機会を与えられました。「旅に病んで夢は枯れ野をかけ廻る」は、日本で国語教育を受けた人なら誰もが知っている俳句です。一生涯を旅に捧げた松尾芭蕉が客死の四日前に残した句です。私の場合木曜夜に発熱し金曜日お医者さんに診ていただいたものの、深夜から床から身体を持ち上げることが困難になりました。

次の日曜は平塚ではお休みをいただいていたので妻の牧する聖書之友教会に出席するつもりでした。平塚の礼拝がまもられたのは綱渡りの結果です。最初に説教をお願いしていた先生が急病で、別の先生が急な代役を快諾してくださいました。私が平塚を代わりにや

ることにしていたら困ったことになる所でした。

聖書之友教会ではふた月ほど前に私の大学勤務の時の卒業生がフラツと来てくれました。そこで今回は他の卒業生や私の大学時代の友人も呼んでクリスマス礼拝をまもることになっていました。呼びかけた私が行けそうにありません。窓から青い空と白い雲を眺めつつ、大学時代、また神学校や牧師になってから出会った人たちのことなどを思い「枯れ野をかけ廻る」気持ちになりました。

新約聖書は私たち信仰者を地上の旅人になぞらええます。ペトロの手紙Ⅰは「各地に離散して仮住まいしている人たち(一・1)」に宛てて書かれています。「本國ユダヤから離散して」という意味かと思いきや「この地上に仮住まいする間(一・17)」とありますから、冒頭聖句にある通り本国はユダヤではなく天です。人は人生という旅路を歩む旅人で、永遠の安息の故郷を目指しているのです。

芭蕉もペトロの手紙も、人生は儚いものであり現世の苦しみは永遠ではないという無常観が似ています。ペトロの手紙の読者は迫害を恐れていました。芭蕉に

目次

| | | | |
|-----------------------------|------------|----------------|----|
| 夢は枯れ野を | 牧師 北川一明 …1 | 100周年 二つのプレゼント | …4 |
| ことば」に導かれて…中村義の追悼 中村寛志 …3 | | 編集後祈 | …4 |

はその心配はなかったでしょうが、常に安住の地を探し求めていたのは同じでしょう。人は理想と現実、さらには生と死という不可避な対立の中を生きているため、現世に安住の地はないという思いは人間の普遍的な渇きです。

そのような厳しい対立の中を生きればこそ、芭蕉は枯れ野を駆け廻る夢を追い、キリスト教信仰は「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい（フィリピの信徒への手紙四・4）」と、どちらも前向きです。死を視野に入れつつも精一杯に喜びをもって生きようとする点も両者はよく似ています。

キリスト教信仰と東洋思想と大きく違うのは、安住の地に何を想定しているかという点です。

キリスト教信仰では天国という絶対の安心と安全の得られる故郷が想定されています。そこへ帰れば信徒も「神の子」として自我も絶対的に安定します。そのために天国への凱旋を信じる者は、地上でもリスクを恐れず自由かつ積極的に生きる事が出来ます。いっぽう芭蕉は自然を愛し自然の中を旅することでここに述べてき

た死生観に至りました。自身の死をも自然の一部とみなしているのが、最期は自然という故郷の中に埋没して行きます。

「聞いたことのない方をどうして信じられよう（ローマー〇・14）」とある通り、芭蕉は肝心な所までは到達できませんでした。キリスト者の方が偉いと言うわけではありません。間かずに近づいた芭蕉の方が偉いかもしれません。ただ天国を信じて、その上で自然を愛して生きることが可能です。そうであればキリスト者の方が絶対「お得」です。

夢で枯れ野を駆け巡る中で、私は行く末も考えました。いつか教会牧師ができなくなっても「巡回教師（ゲスト説教者）に登録するのだろう」と漠然と考えていました。しかし礼拝説教を引き受けても、年齢的に急に行けなくなるリスクが高まると思うと、怖くてできません。

それでも「巡回教師」というキー・ワードから安全・安心なベースとしての故郷を感じるにはどうすれば良いかに思い至りました。一一月の地区信徒研修会では、平塚教会のみなさんは講師の先生と、その講演を聴きに来た人たちをもてなしました。

もてなす奉仕が私たち自身を信仰的に励ますことになったと感じました。先生は私と同年代で、講演を引き受けてくださった後に急な手術があったそうです。仮に先生が来れず急な代替企画になったとしても、みなさんは来会者をもてなしたでしょう。天の故郷は奉仕の積み重ねで確信に近づいて行くのです。「旅人をもてなすこと：、ある人たちは気づかずに天使たちをもてなしました（ヘブライ一三・2）」とある通りです。

聖書之友教会クリスマスマスでは祝会もありました。私が行けなかったために、お客さん同士が互いをもてなさざるを得なくなりしました。天の故郷を感じるきっかけになってくれたことを期待しています。

余談ですが、若い人たちを盛り立ててくれた私の同級生は、学生時代から雅号「呑舟」を名乗っていました。どこでどうして見つけて来たかは聞いていません。芭蕉が「旅に病て」を詠んだ時、まだ死ぬ気はなかったやうで「病中吟」という序のようなものをつけています。その時に「呑舟」という架空の人物がそばにいたことになっていると、ずっと後で知りました。

「ことば」に導かれて…中村義の追悼

中村寛志

手元に、明治39年1月31日 発行、昭和11年8月10日40版 神戸市 英国聖書協会発行という聖書がある。皮表紙であるが、周辺は擦り切れの痕が沢山ついている。扉の裏に、ロマ15:13、中森の記名と聖書の言葉が書かれてあり、宛名は義子様 となっている。

中村義が、結婚の時のお祝いに、司式をしていただいた中森幾之進牧師から頂いた聖書と聞いていた。旧新約聖書で、キウはもつと古い漢字になっている。装丁を見ると、当時としては相当に高価なものだったと思われる。この聖書が、中村義の生涯に深く影響してきたことは、手元にあった時間の経過と引かれた赤い線から推測できる。赤い線は、主に詩篇とマタイ、マルコ、ルカ、ローマ、コリント、ヘブル、ヤコブ、ペテロ書に集中している。今も手元にあるという事は、既に出版から88年経過している。

聖書は、形の上では文字による「言葉」から成り立っている。しかし、ヨハネによる福音書に、『初めに「ことば」があった』という記述があるように、文字の並びの後

ろから聞こえてくる「ことば」は、何を語ってくれたのだろうか。何が語りかけられたのだろうか。

それを『信じる』ことが底力となったと思われるが、全てを支えてくれる「ことば」が聞こえたと確信出来たのは、「ことば」を発する方の圧倒する力を認めて、身をゆだねる気持ちになったと思う。

聖書の「言葉」から、「ことば」を語る方によって示される方向、先々の見通しを信じて、中村義はこの聖書を大切にして来た。引揚げの時も、その後の生活の時にも身近に置き、励まし、慰める力があると信じて、「ことば」に導かれて、中村義の人生は進められて来たものと思う。

生れて8か月後のクリスマスには、幼児洗礼を受けている。キリスト教の信仰に熱心に従っていた母親の決めたこととは言葉、その後の百年の歩みのスタートになるとは知らずに授けられたようだ。

北朝鮮で生活していた34年間、引揚げてきた30歳代の頃にも、更に放浪の数年を経て新潟に居を定め、新潟教会で18年、平塚教会で54年の間も、導きと教友の力

添え、自分の役目としての奉仕に関わりながら、教会から離れずに来た。その間にも、「ことば」によって導かれる恵みに感謝しつつ歩んで来られた人生を想像し、改めて本人の受けた恵みを思う。

しかし、何を聴いたのか、何が聴こえてきたのか。私も聴きたい、私にも聴かせて欲しい。

聴こえてきた「ことば」は、どの様に影響があったのか。本人の書き残したメモが、ノートや手帳に沢山あるが、その中に、「幼少時に日曜学校で覚えた讃美歌、説教で何度も聞いた聖書の「ことば」。確かにこの事は、人生を導き、引揚げ、失業、転居など、変化の多い生活が続いた時も、希望を失わず、『全てのこと』に神様の導きがあるとの確信』があったと言うことが出来ます。」とあった。

聖書の文字に示される「主」や「イエス」によって発せられる「ことば」は、何を伝えようとしたのかと考える時、中村義の亡くなったこと、その死と関係があるのではないかと思う。

人が亡くなった時、死亡、死去、逝去、昇天、召天等の文字で現わす。この世界からいなくなる、この世を去る、天国に行く、

天にのぼる、逝く等、上の方に移って行ったり、見えなくなると想像されている。その中で、読みは同じ「しょうてん」であるが、ふたつの文字がある。

「昇天」と、「召天」だ。

昇天は、死んだ後、その魂は天に昇る、と書く。下には行かず、上に昇って行く魂は、どこまで昇り詰めるのだろうか。果ても無く、止まるところを知らずに昇って行き、その果てはどうなるのかなと思う。昇りつめた先には何が在るのか、闇か、宙「じゆ」かわからない。

キリスト教では、召天とすることが多い。確かに、召天は、召される方がいて、その方が「もう良い。これであなたの勤めは終わった、休みなさい」と招いた結果、魂はその許に招かれて行くと考える。「主」を信じる魂は、死を経て行き着くところがある。召された方のところが、行き着く先だと信ずる時、召された方の元に憩うと考えると安心感がある。あれこれと考えは浮かぶが、確かに「昇」と「召」の違いで、中に込められた想いには違いがある。「ことば」は、主の許から来る。イエスを通して来る。召された魂は、今は「主」の許「中」で、憩いの中にあると信ずる時、安らかな憩いが

ある。

先に召された夫と長女のもとで憩う中村義が、新潟、平塚の教友と共に憩う様子も想像できる。そう信じた時、残された家族も、「主」、「イエス」の許に憩っていると信じて心とおむところがある。

100周年 ニつのプレゼント

12月18日は、幼稚園のクリスマスマズ礼拝、園児たちの演ずるクリスマスマズページェントを通して、皆でイエス様のお誕生をお祝いしました。

一つ目のプレゼントは、全園児に、手づくりの会の皆様が、一針一針祈りを込めて作り上げたチャーム（フェルトや布で作られた飾り）が幼稚園100周年を記念して、サンタさんよりプレゼントされました。



可愛いチャームをいただきました

幼稚園は、大勢の人に支えられて100周年を迎えることが出来ました。19日は、「ありがとう」の気持ちを込めてブルーのリリース（風船飛ばし）をしました。二つ目のプレゼントです。



ありがとうをこめて

園庭で園児と保護者に風船が渡され、園長先生の独唱（こども讃美歌）「生まれる前から神様に・・・誕生日です おめでとう♪」を合図に、風船は放たれ空に舞い上がりました（9時34分）。風船には『平塚二葉幼稚園は、開園100周年をむかえました』とメッセージが添えられていました。

【編集後祈】

今年もあとわずか、振り返ると、あの時は神様に祈り、この時には神様に救われ、いつの時にも神様に頼った一年であったと思います。神様は、さぞお疲れになったことでしょう。その分私達は幸せになりました。

（編集子）